

令和三年八月五日(木)

新田 ゆふき

槍岳の肩に小屋の灯星涼し

百日紅聖観音の頬映ゆる

酔芙蓉引き戸塞ぎしままにして

ひぐらしや信濃の駅の跨線橋

蛸の寄せては返す山の潮

長尾 進一郎

百日紅語らふごとく風に揺れ

団欒の声を灯して路地の夏

梅雨明や空を取り合ふ雲の丈

通せんぼに迂回している蟻の黙

店の軒借りて信号待ち炎暑

新型コロナ感染防止のため「メール句会」「オン
ライン句評会」を実施。
兼題『百日紅』『灯』。

首藤 しずを

百日紅真昼の法話続きをり

白日の校庭広し百日紅

乾びたる庭の鬼灯燃えにけり

と言つて鼻の汗ふくセールスマン

迷ひつつ下るかなたや夏灯

高橋 由紀子

団地の灯それぞれに燃ゆ五輪の夏

花柄にまといつきたる黒アゲハ

迷う心にプルーストの詞雷雨の夜

さるすべり六角地蔵の華やげり

夏風邪や独り暮の石そのままに

宮原 凧

八月の教室に架けよゲルニカ

夕風はむらさきめきて釣りしのが

傷心を隠し日傘を回したり

無住寺を一灯ともす沙羅の花

平らかに生きたい一日(ひとひ)百日紅

齊藤 まさお

法要の庭に咲き満つ百日紅

夏の灯のひとつ残りし夜半すぎ

肘タッチすぐハグになる帰省かな

いさかひのぎこちなき朝夏のれん

友の訃や黙するのみの夏の果

森田 元斐

雲立たす勇み太鼓や梅雨明くる

後ろ髪引かれまた見る氷旗

大谷戸を流れて速し冷素麺

散れど咲く日々積み重ね百日紅

地図帳をなぞらふ旅や夏灯

中村 晃也

灯芯を細めて窓の虫の声

岬の灯揺るがしてある土用波

夕入日に灼ける樹肌や百日紅

彩は風に煽られ百日紅

汐風のさねさし相模酔芙蓉

大津 そうかい

青柿や母を泣かせし十五歳

招魂社泉こんこん途絶えざる

百日紅はらから集ふ三回忌

機の孤影雲の彼方へ消えし夏

探照灯夏の夜空を行き交へり

志村 良知

恋よ叶へと乙女の祈り星まつり

梅雨明けや雨降らし山雲の帯

山間に音の遅れて遠花火

百日紅広場は真昼ただ静か

羽蟻の夜昭和を映す幻灯機

内藤 あした

聖火台灯す聖火や燃える夏

東京五輪パーファイブの蝉しぐれ

つるつるの木の肌をかきさるすべり

浮雲や薄桃色の百日紅

きれいだな真つ赤なスイカと黒い夕ネ

西川 知世

地球儀の裏側は海灯涼し

郵便ポスト炎帝に口を開け

次々と夏雲放ち玻璃のビル

おとなはることも間遠く百日紅

盤の玉動かす一手蚊遣香

今回は、令和三年九月二日（木）です。

兼題は、首藤しずをさん出題の『新涼』並びに、

知世先生出題の『声』です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

「新涼」は初秋の季語である。「涼し」が夏の季語として立って以後、立てられた秋の季語で連歌以降という。夏の季語「涼し」は、夏は最も涼しさを願うときで、樹、風、瀧音、扇の風などの些細な涼味、涼気をいう。これに対して「新涼」は

秋になつての挨拶に、めつきり涼しくなりましたね、とか、涼風や涼気が肌に爽やかさを感じるといふ体感を伴う季語。

(涼し)

飛驒涼し北指して川流れをり

大野林火

仁丹の銀こぼれつぐ涼しさよ

山口青郵

(新涼)

涼新た畦こす水の浮藻草

飯田蛇笏

新涼や紫苑をしのぐ草の丈

杉田久女

季節の移ろいに敏感な感覚の違いが読み取れる。空調の整った現代では見落としがちであるが

是非外にでて秋を体感して作りたい。年々季節の

歯車が合わなくなる現代にどんな秋を体感し句に

落とし込むか挑戦したい。

秋涼し手毎にむげや瓜茄子

芭蕉

新涼や豆腐驚く唐辛

普羅

新涼や身にそふ灯影ありにけり

万太郎

新涼や白きてのひらあしのうら

茅舎

新涼のいのちしづかに蝶交む

蒼石

新涼の咽喉透き通り水下る

三鬼

新涼や尾にも塩ふる焼肴

真砂女

新涼や歯並びのよきハ一モ二カ

志解樹

新涼の母国に時計合わせけり

朗人

新涼や素肌といふは花瓶にも

狩行